

ふるさと

福田 今回、小野先生作詞、渡辺先生作曲で、200曲以上の童謡をおつくりになりましたが、作品にはおふたりの子ども時代の体験が色濃く反映されているのではないかと思います。渡辺先生のふるさとはどちらなのでしょう。

渡辺 申しわけないんですが、これがわからないんです。(笑) 生後すぐ、10日だか2週間だかで東京に来たらしいので、東京生まれと言っているんですが、実際に生まれたのは栃木なんです。



渡辺 茂氏

父親という人は、農家の生まれだったんですが、農業がいやで家を飛び出して、行商で方々歩いていたらしいんです。そして、偶然足利に行った時に織物の知識をおぼえて、その織物屋の娘だった母とふたりで東京に出て、呉服屋を開いたんです。

そんなわけで、「こういうふうな生まれで、こうでした」とはっきり言えないんですよ。戸籍ではいちおう栃木県の赤見村というのが、私の本当の生まれた所らしいんですが。

生まれ故郷という意味での「ふるさと」というと、東京と栃木、どちらになるんでしょうかねえ。

小野 偶然ですが、私も少々、似た生い立ちなんです。実際は、昭和20年の8月22日、つまり終戦の日の1週間後に生まれたらしいんですが、戸籍上は9月23日の生まれになっています。生まれて1ヶ月ほどしてから村役場に出生届を出したようです。

母親が、現在の岡山県高梁市津川町に疎開しておりましたので、疎開先で生まれたんです。生まれて2,3ヶ月して、東京の渋谷区広尾に帰ってきたそうです。「ふるさと」というと、高梁川が流れる緑の美しい津川町のような気もするし、有栖川公園や聖心女子大学のある広尾の街のような気もします。

渡辺 戦後の混乱期ですものね。

福田 それでは先生、いわゆる子ども時代を過ごしたという意味でのふるさとはどちらになるのでしょうか。

渡辺 文京区ですね。本郷、駒込の林町2番地です。

安尾 子ども時代はずっとそこで過ごされたんですか？

渡辺 ええ。家の近くに団子坂があって、そこでずっと少年時代を過ごしました。本郷にはずいぶん緑があって、子ども時代のいろんな思い出が、山のようにあります。それで今でも時々行って思い出にふけったりするんです。

小野 まだ当時の雰囲気というか、自然が残ってますか？

渡辺 ええ、いくらか残っています。お稲荷さんがあって、その境内の大きなイチョウの木も残っています。その反対側には赤い門のあるお寺があって、そこで自分は子どものときさんざん遊んだんです。たまに行っては懐かしんだりするんですよ。

福田 先生は子どものときどんなことをして遊ばれたんですか？

渡辺 ベーゴマとメンコはよくやりました。今とちがって遊びがあまりないんですよ。ゲームセンターがあるわけではないですから。それで今日は何個勝ったとか負けたとか。近所にちょうど同じ年頃の子がいたんです。だからしょっちゅう遊んでいました。

小野 現在の広尾はビルが建ち並んでいます。私が子どもの頃は畑や空き地が家の周りであって、ふたりの兄と姉にくっついて遊びまわっていました。有栖川公園の池のおたまじやくしをとったり、聖心女子大学の校庭に入り込んで桃や柿をとったり、祥雲寺の境内で遊んだり、いたずらっ子でした。

安尾 渡辺先生もいたずらっ子だったんですか？

渡辺 うーん。まあ、中ぐらいですね。だいたい私、肝っ玉の大きい方じゃないですから。いたずらをして「たいした」いたずらまではいかなくて、「たい」ぐらい。(笑)

福田 ガキ大将ではなかったんですか。

渡辺 ガキ中将ぐらいですね。(笑) 強い子がいたんですよ。その子に従うという大袈裟ですが、たてるようになってしまっただけ。でもその子は早くに亡くなったので、そのあとは私がガキ大将でした。

小野 私がガキ少将といったところでしょうか。(笑) 末っ子でしたので、卒からはみ出した自由な子ども時代を過ごしました。

安尾 おふたりとも、子ども時代は自由によく遊んだんですね。



小野 忠男氏